

## 第11回民俗学シンポジウム「食と文化」 報告概要

○瀧澤純（ノースアジア大学 法学部准教授 雪国民俗館館員）

### 『「食べられる」という心理から考える命と食育』

食の安全、食品ロスの問題が取り上げられるなど、食に対する人の関心は高い。私たちの「食べられる」という認識は、何が原因で形成されるのか。これらの原因は3つに分類して捉えることができる。3つとは、毒や寄生虫など身体への影響を含む生理的要因、個人の嗜好を含む心理的要因、地域や時代による変化を含む社会的要因である。今回の報告は、心理的要因に着目する。そのなかでも、生物とともに暮らすことによる愛着の形成を取り上げる。そして、これに関連する、報告者が行った研究について報告する。研究では、イヌやネコなどの動物、タンポポなどの植物を取り上げ、それぞれを「食べられる」かどうかを判断するように求めた。また、これらの判断に意識的な処理、いいかえれば、人間の理性がどのように影響するのかについても検討を行った。この結果から、食育や命の教育などの問題に焦点をあて、提言を行いたい。